

# 旬じょうはん

情勢判断学会 東京本部  
 会員向けニューズレター  
 発行人 古川 彰久  
 事務局 〒252-0321 神奈川県  
 相模原市南区相模台1-23-9  
 Tel.&Fax.  
 042-748-8240  
<http://www.jouhan.com>  
 E-mail:info@iki2life.com

## 3月例会ご案内

日時 : 3月9日 木曜日  
 18:30 ~ 20:30  
 場所 : 港区立産業振興センター  
 10階 会議室3  
 会費 : 1000円  
 テーマ : 「東西古今人間学5」前編  
 テープを聴く  
 演者 : 榊原 高明

### 1. 当たり前のことをやった毛沢東

[この目で見えてきた毛沢東]

その昔、ジンギスカンとか漢の高祖とか中国を統一した人は沢山いたが、新疆省からチベットまで、全世界の四分の一以上の人を集めて統一国家をつくったのは、毛沢東が初めてである。これを実現した実際のやり方をみると学ぶところが沢山ある。たった三人で包丁一丁持ち、革命を始めたのです。書物の中で知った歴史上の人物ではなく、毛沢東とは、何十年も彼と戦争を通して、お付き合いしてきた。自分と戦ったため、毛さんは天下統一が四年ほどおくれた。戦いのやり取りを通じて、この目で見えてきた、毛沢東の姿を探究して少し違った面を引き出すことができるだろう。

[毛沢東の生い立ち]

湖南省の生まれ。長沙の師範学校で学び、師範学校の教師となる。

当時の中国の状況；1911年、清朝が倒れ、中華民国が成立した辛亥革命が起きた。孫文が臨時大統領に迎えられたが、新政府を成立する段になって、辛亥革命に協力した北方の軍閥連中の勢力が強かったため、袁世凱の政府ができてしまった。これに対抗するために、孫文は広東に中華民国臨時政府を作り、軍閥政府打倒のため軍隊の養成を始めた。それが国民党の軍隊となる。

1921年、上海で共産党結成のための会議が開催された。当時ソ連はコミンテルンという世界共産主義の連合組織をつくり、革命の指導に当たっていた。ここから来たボチンスキイの強力な指導の下に中国共産党が成立した。毛沢東は同士ら十数人と共にこの会議に出席していた。

[ことを起こす前に準備する]

この孫文のやり方は、人間学として考える上で非常にためになる。ことを起こすとき何から始めることが大切なのかを教えてくれる。まず士官学校を作り将校を養成した。彼らが後で国民党や共産党の将軍や幹部になって活躍した。

[第一次国共合作]

1924年、国民党単独で北の軍閥を倒すには力が足りないのので、当時力を持ち出した共産党も、仲間に加えようとなった。

[農村調査から得たもの]

毛沢東は広東の農民研究所の所長になった。彼のここでの中国農村調査が、彼のその後のやり方を決める上で、大きな影響を与えた。通常の調査のやり方ではなく、その土地の住民を集めて一緒に座り込み、いろいろ話を聞く。その話をまとめて、中国の農村の実態を掴んだ。

その結果、中国の地主が大きな力を持っていることが分かった。人口の10%ほどの地主が40%もの土地を持ち、貧農は農民人口の60%を占めているのに、彼らの土地は6%に満たない。小作料が高く、7~8割を取られる。小作人は食べて行けず、餓死者もでた。軍閥政府は地主の子弟が幹部になり、地主勢力を基盤に農村を支配していた。毛沢東は「貧農はものすごく恨んでいる。この政府を倒すには地主の支配する地方をやっつけばよい。地主を恨んでいる村の人口の大部分を占める貧農に鉄砲を持たせさえすれば地主は倒れるはずだ」。そう判断して毛沢東は、それを見て革命のとき実行に移した。

[北伐の開始]

1926年、国民革命軍は北伐を開始し、共産党は全力を挙げてこれを支援した。

1927年、蒋介石はついに上海を手中にした。

[国共の対立]

上海をとると、状況が変わった。上海は外国勢力が租界を作り大きな地盤を持っていた。外国勢力は自分たちの利益をまもるために蒋介石と手を繋ぎ、全国統一を支援する代わりに、共産党を追放するということになり蒋介石はクーデターを起こし揚子江岸で共産党殲滅を行い、43万人とも言われる共産党を虐殺した。これにより、全国統一を達成し、中華民国を成立させた。

[秋収蜂起、井冈山へ]

毛沢東ら共産党の人達は手下の軍隊を率いて秋収蜂起と言われる暴動を起こした。毛沢東は農民率いて井冈山に入り、後に朱徳が合流し、この軍隊が後に人民解放軍の基礎となった。

当時の共産党中央は、マルクスレーニン主義一辺倒で、毛沢東は農民主義であるということで軽視されていた。口だけ達者な連中が、毛沢東を下の地位において、威張っていた。

力をつけてきた中国共産党は、1931年、中華ソビエト共和国臨時政府を作り、人口1億3千万人位の地域を支配し、各県にソビエト地区を作り、兵力も30万人位になった。

[2万5千里の長征]

これを見て蒋介石は、大変だとばかりに討伐部隊を派遣も毎回敗退。そこでドイツの将軍を頼み、百万位の大軍をつなげ井冈山を囲み、包囲網をじりじり縮めた。共産党は耐え切れず脱出。これが長征の始まりである。この長征は非常に困難で30万で出発した紅軍が延安に到着できたのは2万であった。後にこの2万人が日本軍との戦争の中で肥え太った。1949年、共産党は北京に入り、中華共和国をつくった。

[理論に基づき行勅]

毛沢東が従来 of 指導者と違うところは、必ず理論を持ち出すところである。マルクス主義の指導者は、レーニンはじめみな理論を持ち出す。毛沢東も矛盾論などの哲学書や、持久戦論などの論文をたくさん書いている。

理論を持ち出して、皆に知らせ、これに基づいて仕事をしていくというやり方は、ナポレオンや秀吉、信長にない。彼の大きな特徴である。

毛沢東が理論を必要とした理由は、社会体制を変えねばならなかったからである。「プロレタリアートよ団結せよ」という新しい理論を実践に移すためにそれを本にした。人間関係を円滑にする場合や人をまとめる時、新しい問題に注意を向けさせるとき、本を書いて呼びかけることは有効な手段になる。これが戦術問題だから、どちらがいいとか悪いとか簡単には言えないが、本を書くことはかなり威力のあることである。

[悩み、欲求を引き出す]

本を書いただけでは大多数の人はそれだけでは動かない。どうすればいいか、その人達が持っている一番の悩み、欲求を引き出してやらないと人は集まらない。井冈山で、どんなに包囲されても、1万から2万の人間を食べさせることは大変なこと。ここのところが、解決できなければ革命などはできない。

[食]を確保

人間は穀物とタンパク質なしで生きてゆけない。このたべるといふ根本なところ、毛沢東は実に上手く解決した。農村調査したことで、多く学んでいた。地主のところには、貧農につくらせた穀物が沢山貯蔵されている。そこに目を向け、軍隊を連れて村へ行き、地主の家に乗り込み、蔵の中か

ら米や、銀貨を持ち出す。その後で貧農連中を集め、穀物を分けてやる。飢えた連中はみな喜び、共産党万歳となってしまう。そこで決して「共産党とは・・・」などと演説しない。言ったところで、それで人間は動きはしないことをよく知っているからだ。飯をもらい、金がもらえばそちらへ行こうかとあるのは当然。こうして同じようなことを近所の村々でやった。どこの村の貧農も、飯を分け与えてくれる共産党を待ち望むようになる。以下項目のみ。

[効果少ない理論]

[敗ける戦はしない]

[深追いしない]

[情報収集]

[共産党中央の誤った指導]

[教条主義の誤り]

[確かな現状分析]

[独創を生かす]

[共産党内の民主化]

[批判と自己批判]

[毛沢東の三つの理論]

[毛沢東の誤り]

以上

## 1月例会報告

日時 : 1月12日 木曜日  
18:30 ~ 20:30  
場所 : 港区立産業振興センター  
10階 会議室3  
テーマ : 「東西古今人間学3」前編  
テープを聴く  
演者 : 石田 金次郎

テープの内容は、本の「第3章ナポレオンと秀吉に見る科学的計算性」の中の「(3) 秀吉の時間差攻撃」という小タイトルから始まる部分である。

以下はその内容並びに討論した感想である。

古今東西の人間学では、信長の科学的計算性を学んだ。次いでナポレオンと秀吉に見る科学的計算性の項ではナポレオンの戦略と戦術並びにナポレオンの失敗した戦略・戦術を学んだ。

今回はカセット3Dでは秀吉に見る科学的計算性である。秀吉の時間に着目した時間差攻撃の迅速な戦法と時間を掛けて相手を滅ぼす戦法の2つを、天下統一の為には戦力の損耗を最小にする戦略の観点から、使い分けている秀吉の科学的計算を紹介している。

時間差攻撃では、賤ヶ岳合戦を取り上げている。信長亡き後、柴田勝家と秀吉が跡目を争う。柴田勝家は信長が上杉への抑えとして福井に据えた。兵力は秀吉3万、柴田2.7万とほぼ同じ

位である。秀吉が勝つには、柴田の兵力が分断されるときだと常にその時を狙っていた。柴田勝家の部下の佐久間玄蕃盛政が、山を越えて秀吉の傘下の武将中川清秀を破り、賤ヶ岳に進出した。秀吉は、相手が勝ってこっちが負けた時に、シメタと思った。秀吉は相手の半分の兵力が賤ヶ岳だと判断し今だと、秀吉の居た大垣城から52kmの賤ヶ岳まで、通常であれば3日かかるところを5時間で全軍3万を移動し、準備の整わない佐久間の軍を敗走させて、北之庄にいる柴田勝家を自刃に追い込んで滅ぼした。この間、柴田勝家の武将であった前田利家なども傘下に加え、徳川家康等有力な人材に対しても心を砕いていた。

時間差攻撃第2弾は光秀との戦いである。秀吉は高松城攻撃中であつた。本能寺で信長が殺されたと聞いて、毛利と1日で講和をはかり、姫路城に戻る。戻るにあたり、鎧・兜等は捨てて早く走るよう指示し、姫路城に戻ったら毛利作戦に用意してあつた戦闘資材で新装備して、予定より3倍半ぐらい早く光秀の居る山崎に移動し、光秀側の武将であつた、細川忠興や高山右近らを味方に組み入れ、準備の出来ていない光秀を敗走させた。時間をどう使うかは戦術問題であり、時間差を有利に使った。

これらを聞いてのメンバーの所感であるが、賤ヶ岳・山崎の戦いは、正に桶狭間の戦いの「勝機は今だ！」と果敢に行動する信長の時間差攻撃の戦法が引き継がれている。また、その情報は一体どういう風に収集したのか、竹中半兵衛や黒田長政等の有能な軍師、間諜を朝廷や大小名やその領国に放ち、極めて精度の高い情報が集められる仕組みが作ったのだらうと推察した。

次は、時間を掛けて相手を滅ぼす戦法である。毛利方の別所氏の三木城の攻略は城を包囲して、食糧攻めで落城させた。2カ年かけての落城である。毛利方吉川氏の鳥取城の場合は、は7月から10月の4ヶ月である。飢餓攻めである。鳥取城の在庫米を商人が2倍の値段で買いとり、在庫米が無くなったときに、秀吉が攻めた。4ヶ月後に鳥取城は飢餓による落城である。

次いで毛利方清水氏の高松城の水攻めである。平野の中の城であるが、周囲は湿地であり、攻めにくい。そこで、水を武器とするために上流の川をせき止め2倍の労賃で堤を作った。が、堤を崩すと一気に水が溢れ、水の中に埋まる城となった。城主清水氏は自刃で落城する。そして、最後の城攻め、小田原城である。海陸とも包囲し、北条の籠城作戦に対して、秀吉側も退屈しない環境を整備し、落城を待つ。やがて小田原城内の内紛や家臣の寝返りで落城する。

以上挙げてきたが戦闘はしていない。秀吉の

面目躍如である。いろいろな条件を考え抜いて、持っている物資動員力、条件の整備に抜きがなく、相手を落城させている。科学的計算性という真骨頂である。

最後に小田原攻めである。北条の籠城作戦に対抗して、秀吉方も包囲している味方の軍への心理作戦、例えば京都から女郎を呼んだり妻子を呼んだりして小さな町が出現したような人の心を掴んだ戦術は、秀吉ならではのものと。

メンバーの所感は、秀吉は時間差を戦術として駆使し、天下統一の為に多面的に「いくさ」を捉え、敵の状況をよく調べ己の持つ動員力、商人の町壻を抑えての経済力を動員し、軍力だけを行使するのではなく、軍力を損耗せず戦わずして勝つ天下統一を達成した戦略には言葉なしで一致した。

また、秀吉の戦略と戦術の判断が明確である例として、尼子氏の上月城をどうすべきかを秀吉は信長に戦略上の決定を伺い、これを切り捨てることを信長は決定をしたと紹介し、明智光秀が尼子氏の処置を巡り戦略上の信長との違い、意思の疎通がなかったのではないかと示唆している。

城野さんの人間学では、昔の人たちの成功を見て、その成功が、どういうソフトウェア、或いは脳のプログラムだったのかを掴み、これを学ぶことにあるとしている。仕事を上手くやるには、相手がどういうソフトウェア、プログラムなのか、こちらがどういうソフトウェア、プログラムなのか、が分かって初めてうまくいくものだ、と述べている。

テープにあって、本には記載ないが、北海道庁に招聘された件にを触れている。北海道庁に招聘されて、工業視察団として行ったおりの話で、城野氏は、物を見に来たわけではなく、どんなソフトウェアでやっているのかが知りたいことだった。が、道庁からは何か付加価値の高い内地の工業誘致をしきりと言った。が、その戦略は間違ったソフトウェアであると遠隔にもうしあげた。内地の工場誘致でなくて、自分で新しい事業を作り出すことが大切なのだと申し上げた。

夕張に行つて大変頑張っていると感じた。一つは夕張メロンだけでなく、リキュールやブランドンなど新しい事業を立ち上げていたこと、又、炭鉱あとをレジャーランドなど立ち上げ、起債したお金も一年で元が取れるようなことであつた。夕張はそれまで炭鉱であつたために、地下にのみ投資をしてきた云々があつたが、それは地上では何でもやる時に制約が少なく、そのため何でも出来るという利点でもある。つまり一番不利な条件は、一番有利な条件でもある、と述べている。

